

推薦の言葉

外国人に対する医療は特殊なものではなく、基本的には日本人に対するそれと同じである。ただ、言葉や文化、習慣や宗教の相違によるハンデキャップに加えて、出身国と日本の保健医療システムの違いがあり、十分な保健医療の提供が妨げられる可能性が考えられる。

本書は、外国人への医療を実施する上での問題点やコツ、ならびに対応を平易かつコンパクトにまとめたものであり、実際の医療現場で活用しやすい内容となっている。本書が在住外国人の医療向上につながることを願ってやまない。

神戸大学大学院保健学研究科国際保健学領域
教授 松尾 博哉

本書は、日本で外国人が受診する際に、医療従事者をはじめとする病院職員が知っておく必要のある基本事項が分かりやすくまとめられています。

病院へ行かなければならない時は、心身に不調のある時です。そのような状況は、病状や症状の重さにかかわらず、誰にとっても心細く不安なものでしょう。病院職員は、そのような患者心理に配慮して、少しでも安心できるような関わりをするように努めています。

しかし、それが外国人患者になると、どのように関わったら良いかとまどうことが多いのが現状です。なんといっても言語の壁があります。特に中国語を必要とする方の受診が多くなっており、的確に通訳できる人が少ないことから苦慮しています。

問題は言葉ばかりではありません。病気は食事や排泄などの日常生活行動に影響するため、文化的背景をよく知らなければ、患者を理解することはできません。病院のルールや病気の治療のために必要となる事項は重要ですが、それを守ることを一律に患者に求めることは、人としての尊厳を損なうことになりかねません。心身の不調がある方を対象とするからこそ、その人の立場に立った理解が病院職員に求められています。外国人患者には特に配慮が必要であると言えるでしょう。

本書を読みすすめると、外国人患者に安心して受診してもらうためだけでなく、日本人患者にかかわる際にも活用できることに気づきます。たとえば東北地方や沖縄では、言葉も違い、風土や風習の違いがあるでしょう。同じ土地に生まれ育ったとしても、それぞれの家庭や家族のあり様は異なります。宗教や信条の違いもあります。

本書は、十分に情報を提供し、それが相手にどのように伝わっているかを確認すること、その上で一人ひとりの価値観を大事にして医療提供にあたるという基本を具体的な事項から学ぶことができます。初めて病院勤務をする人にとっても、ぜひ読んでほしい入門書となっています。

外国人患者の支援を通して、誰にとっても安心して頼ることのできる病院づくりができることを教えてくれる本です。

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
臨床看護学講座
教授 任 和子

目次

第1部 外国人患者の背景を知る

日本における外国人の現状	6
患者の文化・宗教	8
事例からみる患者の文化・宗教	9
各国の医療と制度	14
在日外国人と医療・福祉制度	20
受診時の外国人患者の不安	22
患者とのコミュニケーション	24

第2部 場面から見る外国人患者への接し方

受け入れ時	28
医事業務	30
診療（診察・治療・手術）	32
外来処置	34
臨床検査	36
放射線（画像）検査	38
入院	40
会計	43
薬局	46

第3部 連携を図る

保健所・保健センター	50
医療通訳活用術	54
ちょっと知ってほしい通訳の課題	59

第4部 コミュニケーション支援 イラスト集・多言語シート

動作・症状イラスト	62
診察の時に役立つ単語集 （英語 / 中国語 / 韓国朝鮮語 / ポルトガル語）	64
外国人患者受け入れ度チェックシート	88

第5部 お役立ち情報

お役立ち資料	90
--------	----